随想　プロフェッショナルとは何だろう②

㈱ＰＰＱＣ研究所　加藤　宏光

最近、『もしトラ』という言葉をよく聞くようになった。ご存知のように『もし、トランプが再度大統領になったら…』という仮定を語る接頭語のようなものである（**注1**）。

『もしトラ』は『もしドラ』をもじったもので、まったく上手い表現をするものだと関心する。

ここにある「ドラ」はピーター・ドラッカーのことであり（**注2**）、大の日本好きであった。

ドラッカーは多数の著書で知られているが、今回「プロフェッショナルの条件」というものを取り上げてみる。しばらく前にプロフェッショナルについての記述をしたが、最近の日本や海外を見たとき、プロフェッショナルの今を再考してみたくなった。

ここで、ドラッカーの書物の全体・概要を紹介するつもりはない。しかし、この書物はとても面白く、書き始めの項からいきなり引き込まれる。社会の進化と人間が、社会どう向き合ってきたかを再考する為にと初めの項をまとめて紹介しよう。

二十世紀初頭には、労働の九〇～九五％が肉体労働であり、労働が肉体を酷使する為、その寿命が短かった。五〇才は当時の肉体労働の限界に近く、人々の寿命のそれに相応して短かった。

それに反して今日では、頭脳労働者の比率が極端に増加し、二十世紀当初の三％以下から現在では四〇％にものぼる。肉体労働者の働ける期間に比較して、頭脳労働者のそれは長く、また延び続ける傾向が強い。

また、労働者を雇用する会社の寿命は三〇年と言われる。三〇年で消え去る訳ではなく、ピークをすぎれば、平衡状態を保ちつつ、なだらかに下降する。これを対比すると知的労働者は、その寿命のうちに自らのスキルを磨き、また次への飛躍を考えねばならない時代と言える。

終身雇用の時代は会社人間でよかった（**注3**）。しかし、知的労働者にとっては終身雇用がベストとはいえず、かつてのゼネラリスト（**注4**）は、必ずしも必要とされない。ここでいうゼネラリストとは、スペシャリストと対比される人で、スペシャリストはひとつの専門分野に特化した人、ゼネラリストは全体をある程度深く網羅できる人を指す。そして、ドラッカーは現代では、専門深度のレベルが格段にアップした結果、スペシャリストはどんどん進化し、スペシャリストがカバーしきれなくなる結果、スペシャリストである為には現代有用はスペシャリスト全体を把握できるような特別な場合（人）でなければ通用しない、と言う。

この書物から著者が受けた印象は、かなりの部分で同感である。かねてから、人の寿命がどんどん伸び、企業の寿命を遥かに越えた現代、働く側が会社でなく、自分のアイデンティティを確立できる様に自己研鑽を続

けないと、幸せな人生をまっとうできないと感じていた。

「プロフェッショナルとは、自己研鑽を続け、その結果自分の軸ができている人のこと」と考えたい。

著者が中国のとある会社をサポートし始めてから五年になる。しかし、新型コロナ騒動で三年間は訪中できなかった。つまりは、指導を初めて正味三年。研究所の建設は新型コロナ騒動の最中で、スタッフと顔合わせしたのは昨年四月が初めてのことであった。

研究所には、専従しているリーダー（獣医師）とヘルパーの若い女性六人の他に数人の獣医師や栄養学者数人が関わっている。二〇歳代の若いヘルパー達は、四月当時には、リーダーの指示に従って黙々と作業をこなし、定時には帰宅する、というパターンであった。それぞれの目には光がなかった。リーダーの目も然り。

しかし、彼女たちが、自分たちの日常おこなっているモニタリングの重要性と管理によりいかに生産性が安定するか、を認識するに従って、作業に目的意識が芽生え、月を経るに従って顔つきや目の光が変わってきた。

この変化こそ、彼女たちが「プロフェッショナル」へ成長してきた証（あかし）だと実感した。

会社（組織）は「プロフェッショナル」の為の器（うつわ）であり、自己研鑽で成長した「プロフェッショナル」を受け止められなくなれば、組織自体が下降線を辿るのではないだろうか?!それが、かねてから説かれる《企業三〇年寿命説》と、著者は理解している。

ドラッカーは言う。

「組織は創造的破壊のためにある」と！

注1：『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』（もしこうこうやきゅうのじょしマネージャーがドラッカーのマネジメントをよんだら）は、岩崎夏海による日本の小説。また、同書を原作とする漫画、テレビアニメ・映画作品。

注2：ピーター・ファーディナンド・ドラッカー（Peter Ferdinand Drucker、ドイツ語名：ペーター・フェルディナント・ドルッカー、一九〇九年十一月十九日～二〇〇五年十一月十一日）は、オーストリア・ウィーン生まれのユダヤ系オーストリア人経営学者。「現代経営学」あるいは「マネジメント」（management）の発明者。他人からは未来学者（フューチャリスト）と呼ばれたこともあったが自分では「社会生態学者」を名乗った。日本では、一九五六年に立教大学で教えていた野田一夫が、当時の日本で馴染みのなかったドラッカーの著書『The Practice of Management』の邦訳書である『現代の経営』を出版し、日本に初めてドラッカーの学説を紹介した

注3：かつての日本は終身雇用社会と評価されていた（いまもかなりそうかもしれない）。しかし終身雇用制度はヨーロッパで一九世紀後半に生まれ、一九五〇年頃に欧米で完成したもので、近代工業のコンセプトを完成したものである、とドラッカーはいう

注4：かつては、スペシャリストは、特定の専門分野に詳しい人、ゼネラリストは全分野に詳しい人と分類していた。専門バカはスペシャリストの蔑称であり、専門分野以外は分からない、で済ませられたいわゆる職人気質（かたぎ）である。ゼネラリストと称せられる人は概して少なかったが、大企業（役所を含む）ではスペシャリストで生涯を過ごせた。小企業のオーナーにはゼネラリストであることが要求された。専門がより深くなると、ゼネラリストであることが難しくなり、組織は知能を前提とするスペシャリストのネットワークで構成されるようになり、スペシャリストはその専門性を武器に、企業に縛られない生き方をえらべるようになってきている